

第1部会

学以前の形而上学として示されるものである。

第四に、世界の無意味を徹底させることを通じて、形而上学以前の領域に至る立場が考えられる。これは機械的決定論や目的論という言説化された知識以前に戻る点では第三の立場にも共通する。しかし第三の立場は、言説化されない一方で、当初から意味や価値の根源としての生の意義を肯定するのに対して、第四の立場は意味の不在から出発し、この否定的状態を徹底させることを通じて、無意味を無効にする所にまで至る。そこでは否定が徹底されることで、否定自身が意味を失って肯定に転化する。それは無意味を無意味として成立させている根拠の無効化であり、逆にこの無意味を作り出す態度は、現象世界を矛盾にしかさせないことを指摘するものである。それは意味のない現象世界とは別に、意味ある形而上学的世界を見出すのではなく、現象する世界を無意味として一貫させることの自己崩壊の彼方に、宗教を見出す立場である。これは超越的な観念もなく、生の営みさえ自然化された世界における超越の次元の、ある種の積極的な形態だと考えられる。

日本における公共宗教(論)の射程

新矢 昌 昭

本報告は、公共宗教論を検討し、日本での公共宗教の可能性について論じるものである。公共宗教とは、近年、宗教が「私

事化」に向かうのではなく積極的に公共領域で影響をもっている現状を指す用語である。しかし、公共宗教論には大きな疑問がある。それは公共領域に対して何故宗教なのか、ということである。そこで現在の公共宗教論の内在的な矛盾点に焦点を当て、日本の公共宗教の可能性を問いたい。

公共領域に対する宗教の社会的な貢献についての提言は様々にある。例えば、J・カサノヴァによると、現在の宗教は「脱私事化」している。世界中の宗教が公共領域に参入し、政治的な論争となっているが、それは宗教の伝統を援護するためだけではなく、私的領域と公共領域の間、システムと生活世界の間、個人と社会の間、国民と国家と文明と世界システムなどの間に、「近代的な境界線を定める闘争そのものに参加するためである」という。そして、公共宗教の類型を「国家レベル」「政治社会レベル」「市民社会レベル」とし、「市民社会レベル」の公共宗教が望ましいという(『近代世界の公共宗教』)。このように、公共領域に対する宗教の期待が高まっているといえる。しかし、ここに根本的な疑問が生じる。それは公共領域に対して何故宗教なのか、という意味や役割である。この意味や役割の一つとして宗教間対話にみられる「公共善」が挙げられている。例えば、平和、福祉、公正、そして、それを成り立たせる他者への配慮、個人の責任、徳性などである(山脇直司「公共哲学と宗教間対話」)。しかし、それでも何故宗教なのかは依然として疑問である。

更に、公共宗教には「信教の自由」の問題が関連している。何故ならば、この前提を守らなければ宗教は公共宗教として活

動できないからである。つまり、「信教の自由」を容認している国家の下で合法化された宗教でしか公共宗教として活動できないことになり、そもそも合法的ではない宗教は国家から排除されるのである。また、現実的に公共性は、国家によって認められて初めて存立するので、宗教と同じく国家の下にしか形成できない可能性がある。

そして、公共宗教を日本で考えると次のような特質が関連してくる。日本での公共は「公」という歴史的な拘束性があることである。つまり、公共性の歴史が浅く日本の公共が国家を表す「公」とつながりやすいため、日本での公共宗教は容易に国家宗教として意識されやすいのである。この顕著な例が「公」の神社を掲げる靖国神社問題であるといえる。それを現在抑え宗教間を共生させているのは政教分離規定である。政教分離によって国家の下に宗教が位置していることで宗教間の対立は回避されているのである。

このように公共宗教は、「信教の自由」や政教分離の規定内の中でなければ活動できない。公共領域での宗教の活動には政治的な妥協が求められることになる。そしてこのような中で、では何故宗教なのか、特に何故市民社会的な公共宗教なのかは依然として解けないのである。なおそれでも公共宗教の可能性があるとすれば、諸宗教（あるいは諸宗教間）の対社会的な活動を通して日本の国家の枠組み内で新たな一つの公共性を生む可能性にある。例えば、千鳥ヶ淵戦没者墓苑での諸宗教が営むような慰霊祭の形である。

しかし、翻って考えてみると、例えば行基の社会活動のよう

に、宗教は国家が行いえないものを代わりに行ってきたという伝統がある。つまり、公共宗教は伝統的に存在してきたのである。現代、公共宗教がいわれているのは、近現代社会が宗教を排除し、私事化し宗教の活動を等閑視してきたからだともいえるが、もう一度宗教活動の再確認が必要だと考える。

宗教概念にまつわる言説空間

——現代日本の場合——

近藤 光博

本発表は、現代日本における宗教概念の言説論的布置のモデル化をおこなうことで、『ポスト宗教概念批判の宗教学』の構想という課題への示唆を得ようとした。

①まず宗教概念とその周辺に形成される言説空間を確認した。具体的には、「宗教」という語のことも顕著な意味内容が教団、主として「新興宗教」を指すこと。そこには、犯罪行為や「狂信」といった社会的に評価されない事柄との強い観念連合があること。一方、「宗教」という語が肯定的な価値をもつ場合として、一人ひとりの内面性の純化／立てなおしや日常規範の確立が優先していることなどを確認した。

②古代史の文脈における「宗教的儀式」という表現に注目した。そこから、古代人が執り行う儀礼そのものとしての『宗教的なもの』という観念を抽出した。